ただし、いまだ伝記なども十分整理されていないことも考慮し、まず伝記を整理し、前半は祐天の生涯を横割りにして眺め、後半にその生涯を通じて目指したものを探っていくことにしたい。伝記を横割りにするにあたって、各時代の事績を整理し、客観的な資料と照合しながら祐天研究の基礎となるように配慮しつつ進めていきたい。

もちろん、本論で祐天を語り尽くそうと考えているわけではない。むしろ祐天研究の第一歩であり、祐天を信奉し、研究しようとしている人々の基礎資料となるようにと願っている。

第一章　祐天伝の諸本

●第一節　祐天伝概観

祐天の伝記は、現在でも古本屋を賑わすほど出回っている。その中でも有名なのが『浄土宗全書』（以下『浄全』）に所収の『略傳集』に引用されている『泉谷瓦礫集』（以下『泉谷集』）、あるいは『祐天大僧正御傳記』（以下『御伝記』）、それに『祐天上人一代記』（以下『一代記』）であろう。このほかにも『祐天大僧正利益記』（以下『利益記』）などが多数開版され、ある

いは書写されている。これらは、著者不明のものもあるが浄土宗の僧侶が著作にかかわったものもある。

内容的には、『死霊解脱物語聞書』（以下『聞書』）をはじめとする祐天の悪霊祓いを主題にしたものや、『御伝記』のように祐天がもとは愚鈍で不動明王に智慧を授けられ立志伝的な展開を見せるもの、あるいは浄土宗の僧侶としての立場で書かれたものなど多様に存在する。祐天伝は上人二百回忌を過ぎた昭和になっても新たな伝記が刊行（参考・引用文献の項参照）されるなど、娯楽、道徳、宗教のさまざまな分野で扱われていったのである。

特に、近年再び文学者によって『聞書』が脚光を浴び、文学者は祐天を霊能力者として取り上げた（高田衛『江戸の悪霊祓い師』筑摩書房、平成三年）。それに対し、仏教大学の関山和夫先生は浄土宗の説教譚として見る立場で反論（「『死霊物語聞書』の研究」平成三年『日本佛教学会年報』）するなど、今なお論議の対象となっている。

祐天寺では祐天の名号あるいは遺跡に触れた人々から問い合わせがあると、村上博了先生の著作による『祐天上人伝』（昭和四十三年）によって上人の伝記を語っているが、現在のところこれらの伝記をきちんと整理した論文などは見当たらないのが実状である。

そこで、ここではこれらの伝記の諸本について分類、整理することを試みる。便宜上、浄土宗的立場で書かれたものをここでは「浄土本」とし、版本あるいは写本として広く普及し、文芸作品化していったものを「普及本」として分類することとする。